

研究実践報告

## 10年間の教員生活

桑野美帆\*

My Ten Year's Teaching Practice

Miho KUWANO\*

### はじめに

人と人とのつながりを実感して生きることは、幸せなことだ。つながる喜びを実感することは、生きるモチベーションにもなる。

筆者は、これまで家族や親族、地域の人々、友達、先生、先輩や後輩、同僚など色々な人に支えられて生きてきた。一緒に食卓を囲み続けてきた家族、協力して農作業をしてきた親族、困ったときはお互いさまで助け合える地域の人々、共に遊び共に学び合った友達、大切なことを学ばせてくれた先生達、目標に向かって共に汗を流し切磋琢磨して走った先輩や後輩、共に子どものために努力を惜みず働く同僚の先生達。色々な人とつながることで、心が満たされ、頑張るエネルギーをもらってきた。

筆者は、このような「つながる喜び」を感じられるような教育活動をしていきたいという思いから、卒業論文に取り組んだ<sup>1)</sup>。今回、卒業後10年間の教育活動を学級経営や授業実践をもとに振り返り、今後に生かしていくことを目的に小文を綴る。

### 1 卒業論文『つながる個』—動機と概要—

現代社会には、様々な問題が蔓延している。その問題の中でも、注目したいのが日本における自殺者の多さである。1998年～2011年では年間自殺者3万人を越えていた。現在は少し減少しているが、約2万の人が、自ら命を絶っている。その主な要因は、職業性ストレスと子どものいじめと言われている。

どうしたら、自殺やいじめを食い止めることができるか。それは、「つながり」を実感できる経験を重ねることではないか。人は様々なものとつながって生きている。自然、食べ物、人などである。その中で人とのつながりは、「縦のつながり」と「横のつながり」がある。「縦のつながり」とは、祖先から受け継がれてきたいのちである。「横のつながり」とは、社会の中で関わる人達である。この世に生まれた人は、誰でもその「つながり」の一員である。その真実を実感することができれば、自ら命を絶とうなんてことはないのではないだろうか。

子どもたちが身に付けなければならない力は何か。学力はもちろんのこと、人とのつながりを実感し、人とつながる力ではないか。門脇は「人と人がつながり、社会をつくっていく力」を「社会力」と言い、その必要性を主張してい

\* 横浜市内公立小学校教諭、本学初等教育学科26期生

る。人間は社会力の種をもって生まれてくるが、そのままにして育つものではなく、育てようと思って育てなければ、育たないという。そして、社会力は、「生まれた直後から始まる大人との直接的な応答や、多様な他者と相互行為を繰り返すことによって培い育てなければならないもの」という<sup>2)</sup>。

学校教育で社会力を育てるためには、「協働」が必要となる。「協働」とは、「共通の目的を達成するために、対等な立場で互いに協力し合うこと」と武藤は定義づけた<sup>3)</sup>。また、協働のイメージとして、筆者は斎藤隆介氏と滝平二郎氏のかいた『半日村』という絵本を紹介した<sup>4)</sup>。

この絵本は、世代を超えて子どもと大人が協働して村の危機を解決していく話である。この絵本の登場人物から、学べることがたくさんある。自分の村を何とかしようと強い気持ちを持ち、1人で考え行動した一平。周りに冷やかされても動じない意志の強さ。その行動にいち早く気づき大人たちよりも先に心が動いた子どもたち。はじめは馬鹿にしていたが、子どもの思いを受け止め、みんなの夢の実現のために仕事のやり方を教えてくれた大人たち。子どもと大人が共に汗を流し、協働することで村をよりよく変えることができたのである。

卒業論文では、協働の必要性和そのイメージである『半日村』の紹介までで終わっており、授業等の提案までではできていない。しかし、協働のある学級づくり、学校づくりが成されれば、協働のある社会が築いていけるのではないかという仮説までは立てられた。そして、協働のある学級づくり、学校づくりが成されれば、きっと世の中にあるあらゆる問題を解決する突破口になるという確信と願いを込めて、卒業論文を書き終えた。

学校現場に出てからの筆者は、「協働」を大事

にして学級経営や授業などの教育活動が行えたのであろうか。授業実践・学級経営をもとに、振り返っていく。

## 2 授業実践

### (1) 総合的な学習「手と心でふれあおう」【資料1 参照】

#### <材の成立と教師の願い>

教員生活3年目の実践である。本単元は、4年国語科「だれもがかかわり合えるように」という単元を通してできたものである。著者は視覚障害をもちながらも、点字を通して、コミュニケーションをとり続けたことを書いている。そして、目が見えない人だけでなく、耳が聞こえない人は手話や指文字を通してコミュニケーションができることを知ることができる。子どもたちは、2年生の音楽コンサートで手話を使った発表をしていて、手話にも関心があった。

学習発表会についての話し合いで、子どもたちの意見が、社会科の授業で行った資源回収の学習をやりたい児童、福祉の学習をやりたい児童とで意見が分かれた。熱い話し合いが行われた。話し合いでは様々な思いが出てきた。「手話で障害のある人と会話ができるから手話を覚えたい。」「手話や指文字ができると役に立てることがあるかもしれない。」「お母さんやお父さんがあまり知らないことだから勉強して伝えたい。」「手話や指文字は動きがあって楽しいから、知りたいと思う人が増えるかもしれない。」「障害について悪いイメージをもっている人がいるから、知ってほしい。」「障害をもつ人の気持ちを知りたい。」「障害のある人とどのようにかわればよいか考えたい。」などの障害をもつ人もつながりたいという思いがあふれて、福祉の学習を進めることになった。

話し合いの数日後、資源回収組の児童の1人

は、自分の家で、アルミ缶でコップを作り、学校に持ってきて筆者に見せてくれた。みんなでごみの学習をしたかった気持ちを昇華させたかったのだと思う。

話し合いの時間も延長して、限界まで調整したものの、話し合い中の筆者の立ち位置、役割は、どうであったか。筆者が、福祉の学習を取り入れたい気持ちも見え隠れし、その様子に反応してくれた児童もいたのではないかと思う。

今振り返ると、福祉の学習の中にも、障害をもつ人のごみ出しも取り上げて資源回収の学習もできたのではないかと考える。当時の筆者には、そのような発想はなかったのが残念である。学生時代に1年間、特別支援学校寄宿舎生活指導員を経験したことがあったにもかかわらず、障害をもつ人の困り感に着目することができていなかった。関わることを通して気づくことができた困り感も、関わりが減ることで自分の中で風化させてしまっていたのである。様々な人と交流を続けることは、大切な機会であり、色々な気づきをもたらしてくれる。それにしても、資源回収組の児童も納得し、切り替えてくれたことが本当に立派だった。筆者は子どもたちの「人の役に立ちたい」「いろいろな人とかわりしたい」という気持ちが生活の中で生かせることを意識して学習を進めていった。また、これまで以上に身近に接している友達一人ひとりの違いを認め、相手の立場に立って考え、行動することにもつながってほしいという教師の願いも込めた。

#### <手話サークル K 先生との交流会>

K 先生からの話を聞き、耳の聞こえない人の大変さや苦労や努力を知った。そして、苦労や努力の陰には、ご家族のあたたかい支援があったことや学校には障害について理解してくれるやさしい友達がいたことを知った。子どもたち

のほとんどが、耳の聞こえない人と出会うのが初めてだったので、どのようにかかわっていいかわからない様子があったが、K 先生に耳が聞こえない人と耳が聞こえない人と会話できる方法を教えてもらい、手話や指文字以外にも口話やジェスチャー、筆談、表情などでコミュニケーションができることが分かった。K 先生が明るく、笑顔の絶えない方だったので、障害をもっていても日々を楽しんで生活できることや「自分たちと同じ」であることに気づいたようだった。子どもたちからは、「もっと話したかった」という声が出るほど、充実した交流会になった。

#### <学習発表会「MIDORI ～つながる輪～」を歌って>

学習発表会では、調べたことをポスターセッションし、体験コーナーで点字体験やアイマスク体験等を用意し、手話コンサートを開いた。手話コンサートでは、音楽会で歌った「MIDORI ～つながる輪～」(菊本り子作詞・作曲)を手話を交えて合唱することができた。交流会で K 先生から、歌詞の手話表現が難しい部分を教えてもらい発表まで何とかこぎつけた。学年で何度も練習した1度発表したことのある曲だったが、手話を通して、歌詞の意味を深く理解するきっかけにもなった。歌詞を可視化できる手話を使った表現は、だれもが歌詞を理解するのも分かりやすく、健常者にとってもいいツールであることが分かった。

歌詞にある「繋がってく 広がってく 心おどる 素敵なお会い 人と人 まちとまち 時を越え 海を越え みどりがつなぐ 心と心」という歌声が響く中、子どもたちの生き生きとした表情を見て、色々なものがつながった気がした。子どもたち同士がつながり、子どもたちと K 先生がつながり、国語科や特別活動、総合

的な学習の時間等の学びがつながり、その発表の場にいる人と人とも心と心が通じあう一体感を感じた。障害を越えて、障害のある人とも立場が違うだけで同じ人間であること、そして、手と心で繋がっていけることを発表の場で広げられたのではないかと考える。子どもたちのこの学びがこれからも様々な人と次の学びと繋がっていったらいいなと思った。

学習発表後、いつもの日常に戻ったが、総合的な学習の時間を通して、聴く耳をもち、思いやりのある気持ちの良い行動が自然ととれる学年になっていったのではないかと振り返る。その後、この学年の学級担任にはなれなかったが、低学年思いの心優しい、働き者の高学年へと立派に育っていった。

(2) 国語「斎藤隆介氏と滝平二郎氏の作品のすてきな登場人物を読書ポスターで紹介しよう～モチモチの木～」【資料2 参照】

<単元についてと教師の願い>

教員生活4年目の実践である。3年国語科「モチモチの木」を中心とした斎藤隆介氏と滝平二郎氏作品の並行読書を通して、それぞれの登場人物のすてきなところを読書ポスターで紹介しようという単元である。児童にとって年齢の近い登場人物が出てくる斎藤隆介氏と滝平二郎氏の作品は、子どもたちの心を動かす大きな力があると思う。登場人物に思いをさせ、自分と登場人物を重ねる経験の一つになればと考えた。また、その読書体験を友達に伝えることを通して、登場人物の魅力を友達に伝えあう楽しさや一人ひとりの感じ方や物事の捉え方に違いがあることを感じてもらえればと考えた。そして、読書への興味や関心につながればと考えた。また、本教材では、場面ごとの登場人物の行動や会話から人物の気持ちや性格を捉えながら読む

ことを通して、「おくびょう」な豆太がじさまのために夜道を走り医者様を呼びに行ける「勇気のある」一面があったりすることに気づいて、豆太のすてきなところに着目させキャッチコピーを入れた読書ポスターづくりをしていくことにした。「だれにでもキラッと光るいいところがある」ということを感じて、実生活でも人と関わるときに悪い部分ばかりに着目するのではなく、いい部分に着目して、その人らしさというのを捉え、自分に取り込みながら、生活してほしいと考えた。

<授業の成果と課題>

成果は、3つある。1つ目は、どの児童も登場人物の性格や気持ちの変化、情景などの叙述を想像しながら読むことができていたことである。学力面で心配のある児童も、場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格を知るために、そのヒントとなる言葉に着目することができていた。この学習に至るまでの単元でも、「場面の移り変わりに気づくこと」「登場人物と自分を比べる」などの経験から、登場人物の人間性、その人らしさを捉えることができるようになっていたのは、学びの連続性があった、積み重ねてきたものがあったからだと考える。

2つ目は、表現したり理解したりするための必要な語句を増やし、また語句には性質や役割の上で類別がある体験を積み重ねられたことである。「人柄を表す言葉」「思ったこと・感じたことを表す言葉」といくつかの単元を通して、授業のたびに言葉を共有し、画用紙に書き、掲示してきた。学習の足跡を残すことで、積み重ねて学習してきたことが視覚的に分かるし、何より学習で必要なときに確認することもできる。教室にいつも貼ってあることで、無意識的に意識的にも言葉に触れる機会となった。

3つ目は、並行読書を通して、児童それぞれ

が色々な登場人物に巡り合えたことである。自分の村を何とかしようと強い気持ちをもって動き始めた一平を描いた『半日村』、勇気と知恵のあるあさを描いた『火の鳥』、無邪気なソメコを描いた『ソメコとオニ』、自分の命までも犠牲にして山を守った『三コ』、思いやりのあるあやを描いた『花さき山』、力強く勇敢に村を守った『八郎』、おとうやおかあが死んでもたくましく生きる『ふき』、猫たちを鼓舞し猫ばばに立ち向かった三平を描いた『猫山』、友情を描いた『ユとムとヒ』、好奇心が旺盛で人間の優しさに触れた『かみなりむすめ』、黒雲おやじを倒そうと勇敢に名乗りを上げた一郎次を描いた『ひばりの矢』の計11作品を用意した。すてきな登場人物に出会い、読書ポスターを書く意欲にもつながったと考える。

課題は、3つある。1つ目は読書ポスターを書くにあたっての相手意識がまだ薄かった児童がいたことである。ほとんどの子どもたちは、一生懸命ポスター作りに取り組み、相手意識をもって取り組むことができていたが、「クラスの友達に見せよう」という相手意識が薄かった児童もいた。学習への動機づけが内なるものでなかったのだと反省する。ポスターを見せる相手を学級の友達に絞るのではなく、自分が見せたい人を意識させながら進めていけばよかったかもしれない。

2つ目は、読書ポスターの各項目のつながりに整合性がない児童がいたことである。書き方は例示していたが、「素敵だと思ったところ」と「そのわけ」がつながっていない児童も何人かいた。事前の個別指導と根拠ある作文の積み重ねが今後も必要であることが分かった。

3つ目は、交流の手立が薄かったことである。授業後の研究協議の中で、読書ポスター完成後の班での交流が浅かったと指摘を受けた。

交流するにあたって、司会などの役割分担、交流の流れまで示す必要があったのではないかと考えた。しかし、今思えば「順番を決め、順番で紹介していこう」という指示だけでも、完成したものを見せたい気持ちがあふれ、自然とい交流ができていたと筆者は思う。

### 3 教員経験をふり返って

#### (1) 一般級担任経験、個別級担任経験を通して

筆者は初任校で、1年生担任を2回、3年生担任を2回、4年生担任を1回経験した。2校目では、個別支援学級の担任を経験した。筆者の担任経験は、人に語れるほど立派なものではない。ただ、挨拶をする、給食指導をする、掃除指導をする等「当たり前のことを当たり前」そのことの大切さを担任生活で学ばせていただいた。同時に「困ったときはお互い様」の風土のある職場に恵まれたことに感謝している。

#### <初任で奮闘した1年生の担任>

筆者の初任校でのデビューは1年生126人の入学式から始まった。筆者は、初任者で1年生担任ということで、強力な学年メンバー陣3人に囲まれた。1年生経験豊富なベテランの学年主任。特別支援のプロフェッショナル。学校の期待のホープ3年目の先輩。とても頼もしく、いろいろ学ばせてもらったことを今でも鮮明に覚えている。学校事務の基本から給食の配膳の仕方、掃除の仕方、けんかの仲立ち等の児童指導、掲示物の付け方から作り方、机間指導の仕方、指導案の作り方等である。また、強力な学年陣に加え、初任研修コーディネーターの先生や初任研修担当の先生までいて、初任者には手厚いサポートがあり、心強かった。

その体制があったにもかかわらず、学級では色々な事件が起きた。教室を飛び出す児童が、1人から3人4人と増えたり、虐待を訴える児

童がいたり、けんかが絶えなかったり、教室や友達とのランドセルに落書きがあったり、事は少しずつエスカレートしていった。1つ1つの出来事に対応しきれない自分が悔しくて仕方なかった。卒業論文とは裏腹な結果に陥ったことが残念でならなかった。

原因は何だったか。まだ慣れない一斉指導と特別支援が必要な児童に必要な個別の指導・支援が上手く回らなかったこと、児童理解をしつかりできなかったことだと感じている。「授業がうまくなりたい」という思いとは反対に、電話での保護者対応、管理職・学年への報告を済ませ、様々な会議を終え、児童指導ノートを記録する頃は夜遅く、授業の準備をする時間は、限られていた。そんな毎日を支えてくれたものは何か。一生懸命がんばる子どもたちの存在とあきらめずに面倒を見てくださった同僚の先生が存在である。トラブル対応では、必ず学校組織で対応してくださった。「このままでは、終われないなあ。」と感じていた時、同じ学年の先輩先生が、校内授業研究の準備を一緒にしてくださった。指導案から、教材の準備まで付き合ってくださり、1月の校内の授業研究会が行われた。国語の「ものの名前 おみせやさんごっこをしよう」である。この時の子どもたちが、とても生き生きしていたことがうれしくて仕方なかった。こうして最初の1年間が終わった。

2年目以降は、1年目の反省を生かし、学級経営を行った。力を入れたのは、授業づくりと児童理解だ。子どもたちと共に遊ぶことも楽しかったが、教材研究を丁寧にする分、子どもたちの学びにつながるのがうれしく、とても楽しかった。気になる子の児童記録も欠かさず書いた。担任と保護者の協力体制をつくるのにも役立った。初任校時代は、一般級担任の辛さだけでなく、楽しさも経験させていただいた。子

もたちは、学校で過ごす1日のほとんどの時間が授業である。その授業が楽しくなければ、「学校は楽しくない」と感じさせてしまうのだ。「学校は楽しいところだ」そのことを伝えなかった。頑張る子どもたちの姿が原動力となっていた。

私の大学時代に必要だった学びは、出会う子どもたちのための教材研究だったのだと感じる。大学時代は、色々な経験をした。理科支援員に特別支援寄宿舎生活指導員に社会施設スタッフ等の教育現場に関わる経験を積むことができた。そして、様々な人と出会い、自分がいつも試された。「教えることが自分の中にないといけない」そのように痛感して、卒業論文や教員採用試験の勉強に励むまでに終わっていた。

教員になってからは日々「教えることは何か」を吟味しながら教材研究に励むのであった。そうして、初任校の5年間を過ごし、様々な子どもと関わるほど、特別支援教育に興味がわいていった。担任として個別的に支援できることもあるが、その子にとって本当に必要な支援体制を整えていくことの必要性を理解し始めた時だった。また、初任校を出るころ、人生を共にする伴侶ができていた。

#### <初めての個別級担任と妊娠>

教員生活6年目。特別支援教育への興味が高まった頃、筆者は2校目に移り、個別級を担当することになった。担当する子どもたちは、5人であった。重度の自閉症で知的障害をもつAさん。肢体不自由で車いすでの生活をするBさん。療育手帳の必要がなくなり一般級の転籍を1年後に控えた双子のC君、D君。不登校から個別級で過ごすことになったE君。障害も性格もそれぞれの子どもたちを見る毎日は、充実していた。一般級の経営との大きな違いは、決まったカリキュラムをこなしていくのではなく、個別の教育支援計画・個別の指導計画に沿って

子どもたち一人ひとりに応じたカリキュラムを過ごしていくことであった。もちろん、個別級共通の朝の会や体育の時間もあるが、基本的に一人ひとりの時間割が違うので、今誰が交流に行っていて、誰が個別級に残って、何を学習するといったことを把握することが大変であった。バラエティに富んだ5人の学習内容は、本当に様々であった。一般級への転籍を控えたC君とD君は、ほとんどが交流級で過ごし、国語と算数は個別級で当該学年の学習を個別的行った。C君とD君と同じ学年の不登校のE君は、遅めに登校し、国語と算数を中心に学習し、給食を食べずに帰る。また同じ学年の知的障害のAさんは、体操や読書、視写絵本など独自の学習課題を学校のカリキュラムに合わせながら行った。肢体不自由のBさんは、音楽や図工を交流級で過ごし、国語と算数、社会、理科など個別に行い、体育は個別級の体育で補った。

このように、それぞれの障害や能力に応じた学習をしていくのが特別支援教育なのだあと身をもって学ばせてもらった。一人ひとりの障害、特性があって、それに合わせた学習をする。そして、個々が自分の課題を葛藤しながらも乗り越えていく。課題を乗り越えられないときは、また試行錯誤する。その繰り返しであった。落ち着いた環境で、自分のペースに合わせて、個としての学びをしっかりとできた。

また、個別級のみんなは、それぞれの障害や特性を認め合って、補い合って、生活する姿が喜ばしかった。移動するときはBさんの車いすを引いてくれたC君とD君。ほぼ交流級で過ごすC君とD君の癒しの存在でいてくれるBさん。自分の好きなものに夢中になれるAさんのおしゃべりは、Bさんを笑顔にしていた。個別級担任として1年間の務めが終わるころ、私は妊婦になっていた。自分の子どもをもつ喜びに

浸っていたが、産婦人科に最初の検診に行くと、病気が見つかった。子宮の先が腫れてしまう卵巣嚢腫という病気だった。お腹に小さい赤ちゃんがいるリスクのある状態で、手術を行った。主治医が最善を尽くした結果、手術は成功し、リハビリ時期を終え、復帰した。個別級の子どもたちや保護者が復帰した初日にあたたかくお出迎えしてくれたことが忘れられない。復帰して穏やかな学校生活にもどったが、間もなく、産休に入り、そのまま、産休と育児休暇に入った。

## (2) 級外家庭科専科と特別支援教育コーディネーター通して

無事、出産を果たし、育児休暇を終え、現在4歳の息子を子育てしながら、短時間勤務で働いている。子育ては特別なことをしているわけではない。強いて言えば、生活リズムが乱れないことと栄養バランスのとれた食事には気を付けている。当たり前のことだが、意外と苦勞する。そして、この生活リズムと栄養バランスの取れた食事を保つために、短時間勤務をしているといっても過言ではない。12時15分定時の勤務は、きりのない仕事で、3時、4時、5時と時間はまちまちであるが、フルタイム勤務よりも早く帰宅ができ、遅くとも6時までには息子に夕飯を提供できる。息子の睡眠時間を多く確保するために、夕飯やお風呂を素早く済ませ、水分補給に歯磨きなどの寝支度をして、絵本を読み聞かせ、就寝8時を目指している。その生活習慣のおかげか、コロナ渦中も風邪もひかず、心身とも健康に過ごすことができている。最近、トイレでうんちができたり、鼻水をかむことができたり、自転車も補助輪なしで乗れたり、ひらがなカタカナを読めるようになったり、少しずつ健やかに成長してくれている。

この間で感じたことは、子ども一人ひとりの大切さである。子ども一人の命が誕生するまでには、その両親となる二人がそれぞれ一生懸命生きてきて、出会い、恋をし、結ばれ、妊娠し、お腹で10カ月大事に育てられ、やっと生まれてくるという経緯がある。自分の子供を出産するまでの経験をしてから、一人ひとりの子どもの大切さがより理解できた。どの子も、「大切にしなきゃなあ」と改めて感じている。

そして現在、短時間勤務で働いて3年目になる。担当は、家庭科専科と特別支援教育だ。興味があった家庭科と特別支援担当を任せられたことが喜ばしく、意欲は高まった。この2～3年間で学んだことは、担任の先生の役割の大切さと担任の先生を支える級外の動きの大切さである。困った担任を一人にしない「チーム支援」が大切だ。自分自身が、担任を経験して、困ったときに助けてくださった周りのサポートがあったからこそ、学級経営ができていた。困っていなくても、みんなで子どもを育てようとする姿勢が、よりよい学校をつくっていく。級外として、担任の先生をサポートできるよう今後も努めていきたい。

#### <家庭科専科について>

家庭科を教えるのは楽しい。「生きる力」を育てることに強く結びついている家庭科を教えられる喜びを感じながら、授業に臨んでいる。子どもたちは、やがて大人になり、自立していく。その手助けとなるのが家庭科である。生活を支える衣食住の基礎的な知識や技能を身に付ける教科である。

しかし、筆者は家庭科を教えるのも初めてで、課題解決学習になっていない教え込みの授業になっていることもあった。この時の筆者の家庭科の教育観はまだ狭かった。構成された教科書や指導書に載った題材をしっかりと丁寧に教える

ことが大事だと思っていた。もちろん教科書は大事だ。最近紹介されて読んだ小平はライフデザインについての家庭科について次のように述べている。「この自立は『個』が主人公です。しかし、個は個のまま孤立無援には生きられません。この個は、常に他者とともに存在します。他者とは、人であったり、社会であったり、自然であったりと広くとらえたいと思います。広い意味での環境という言葉におきかえてもいいかもしれません。他者へ働きかけることで相互作用が生じ、そこから反射・投影されるものによって自己を認知する。他者との関わり合いのなかで関係性がつくれ、学び、鍛えられ、やがて自立へと成長していくのだと思います。ここで大事なのは、他者と『関わる力』や『つながる力』であり、もっとも身近な他者が家族だという言い方になります。人や社会や自然と会話する、そして関係性をつくっていく。衣・食・住のそれぞれと、異性や乳幼児や高齢者や障害者と、地球環境や多様な生物と、伝承文化や地域社会と関わる。つまり家庭科は、他者との関わりの教科、関わり方を学ぶ教科と考えてもいいかと思うのです。」<sup>5)</sup> 家庭科は、「個」が生活面で自立するための知識や技能を養っていき、生活文化を学んでいく半面、「個」とあらゆる他者（家族、友人、地域社会等）との関わり合いながら学んでいける教科であることを感じた。まさに、「つながる個」に通じるものである。

筆者が家庭科の中で特に力を入れてしまうのは、食の題材である。食育の大切さが叫ばれている昨今、子どもたちの興味関心も高く、いのちの「横のつながり」の1つである食の題材は、こちらも腕まくりをしてしまう。「なぜ、食べるのか。」「どんな食べ方をしているか。」「どんな作り方をすればよいか。」を子どもたちに考えて



もらい、食材とのかかわり方を学んでもらう。食に関して真剣に考える要素と実際に自分で作る喜びがあり、出来上がると家庭科室は、充実感と満足感であふれる。また、子どもたちの個々の発想の面白さにも出会う。

5年生の「ゆで野菜サラダづくり」の盛り付け1つとっても様々である。きちんと種類ごとに分ける子、顔の表情をつくる子、フランス料理の前菜に出てくるような盛り付けをする子、班全員で取り分けて食べるよう大皿で盛り付ける子などである。「ごはんとみそ汁づくり」では、ガラス鍋を使ってご飯を炊き、みそ汁の作り方を習い、最後は同時調理まで学習する。炊飯器のごはんに慣れている子どもたちは、ガラス鍋で炊くごはんのおいしさに感動を覚える。煮干しのだしでとったお味噌汁づくりも新鮮で、またうまみを感じながら味わっている。

6年生の「1食分の食事づくり」では、ごはん、みそ汁に加え、主菜と副菜を考え、栄養バランスを考え、最後に同時調理を行う食の題材の集大成である。家庭生活で生きるよう、家族に作るという設定にして、最後に家庭実践の宿題を入れる。家族に作るということがモチベーションになり、ほとんどの子が意欲的に取り組んでいる。最後は、食事作りの大切さと同時に大変さも感じるようだ。今後も、生活に生きる家庭科の実践を試みていきたい。

#### <特別支援教育について>

級外として、一般級在籍の「気になる子」「配慮を要する児童」に関わるが多くなった。ADHD傾向のある子、自閉症スペクトラム症の子、集団不適応傾向のある児童、LD傾向のある児童などである。そういった子をいち早く、学校全体で見取り、支援体制をつくるシステムづくりを特別支援コーディネーターとして務めさせていただいている。①保護者からの特別支

援教育の希望表②特性を調べるための担任による気になる子調査③全学級TTの配当を通して、重点サポート児童を決め、実際に特別支援教育を行う流れである。職員全体の共通理解を図るための、児童理解の場も設けてある。「子どもの社会的スキル横浜プログラム」Y-P研修も2回行い、個の変容、集団の変容を見ていく。

大きなトラブルは、負の出来事が重なって起きることが多い。ある事例だが、5年生のA男が、隣のA男を注意したB男を殴って教室を飛び出した。この時、殴るきっかけになったのが、B男の注意した一言であったが、問題はそれだけではなかった。学級でのA男に対するイメージが悪くなってしまっていることや、担任との信頼関係が築けていないこと、低学年のうちに特性があったのにも関わらずA男自身の社会的スキルを育ててあげてこなかったこと等の負の出来事が重なっていたのである。まずは、信頼関係を築く。担任と築くことが難しい場合、築けそうな教員と築き、学校との信頼関係をつくる。そして、少しでも良い所や普通にできたことがあったら称賛する。そうすると、次第に周りの友達も「A男はA男で頑張っている」と認め、友達との関係も良好になる。そして、ケース会議を行い、その子のもつ背景やよさなどを書き出し、短期間で重点的に講じる手立てを検討し、実践、振り返りを繰り返す。問題が起こる前に、問題が起こるサインがある。未然に防ぐことが肝要である<sup>6)</sup>。低学年のうちから、しっかり見取りを行い、何か落ち着かない、集中できない、学習が厳しい、休みがちである、遅刻が多い、あいさつをしないなどを見取り、早めに支援を講じていくことが大事だと考える。

また、学校組織で動く半面、担任の役割も明らかになる。特別支援教育が必要な児童の「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」を作成

し、それに沿って合理的配慮を学級の中で行っていかねばならない。そこで、必要になってくるのが、ユニバーサルデザインの考え方である。一般級在籍の特別支援教育を受ける子の特別支援教育を受ける時間は、限られていて、学校生活のごく一部である。学校生活のほとんどの時間を、学級で過ごし、一日のほとんどが授業での関わりとなる。だからこそ、授業のユニバーサルデザインが必要になってくる。そして、授業のユニバーサルデザインは結果的にみんなにとって「分かりやすい授業」になる。筆者も勉強し、校内研修をもちながら、情報提供していきたいと考えている。また、勤務校の特別支援教育の在り方も再考して、進めていかなければならないと感じている。

#### 4 おわりに

さて、筆者は「協働」を大事にして教育活動ができただろうか。1つ1つの実践での成果や課題はあるが、人と人のつながりを大事にしてきた。

そして、小文を綴ることで強く感じたことがある。それは、「つながる個」を育てたいならば、自分自身がいつでも、どんな場面でも協働できる人間になっていなくてはなあと考える。学校生活では、色々な人と関わる。児童、教職員、保護者、地域の方等であるが、その様々な人と、どのように接するか、関わるかを児童は見ている。児童にとっての身近な人的教育環境ともいえる教員が人と接する、関わる上での見本となるのではないか。

こういう言葉を聞いたことがある。「山の歩き方は、自分の歩き方で教える」という言葉だ。山登りでは、斜面に出ている木の根っこや石を生かしながら歩いたり、時には避けて歩いたり、体の向きを変え歩いたりする。あるものを活か

したり、自分を変えたりしながら歩く。教育場面ではそうした自分の歩き方が試される。だからと言って、変に力を入れずともよいと思う。自分の前にも、先輩はいるし、間違えた歩き方をすればそれを見て後学にしてもらえればと思う。しかし、できる限り、よりよい歩き方で子どもたちの前に立ってほしいと思う。

教員生活10年間を振り返ると、つながる喜びを感じられることもあったが、100%いいことばかりではなかったなあとと思う。しかし、担任をもっていない現在でも「また、担任として働きたい」という思いが強くなっているのが分かった。それは、筆者自身が、子どもたちと「つながる喜び」をまだまだ欲している証拠なのだと思う。教員になった動機は色々あったが、1番は、色々な子どもとつながっていききたいのだなあと改めて感じる事ができた。色々な子どもたちと出会い、「共に遊び」「共に学び」これからも育ちあっていきたい。

今後は学校内でも中堅としての立場になっていく。一朝一夕には理想の教員にはなれないが、自分自身が「つながる個」であり続けながら、子どもたちを「つながる個」に育てるために、日々邁進していきたいと思う。そのために大切にしていきたいことは、①子どもの見取りと子どもに合った教材研究②日々の教育実践の振り返り③様々な本や人と出会い、記録を残すことである。

小文を書くまでの筆者は、卒業論文が自分の中から薄れていった。自分の中で10年間の成果や課題がつかめず、ただ漠然と仕事と子育てに追われる忙しい日々を送っていた。日記やメモなどを書く習慣が、社会人になり、多忙さのあまり皆無となっていた。自分の中でもまとまっていなかった教員生活が小文を書くことによって、点と点がつながって、線になったような気がす

る。また、多忙の中でも、自分を振り返り、書くことの大切さを改めて再確認できた。

#### 付記

小文を書くにあたって、10年間の教員経験を振り返るいいチャンスをくださり、気づきや感想をくださった徳本達夫先生に感謝しています。そして、大学を卒業して、10年経っているにもかかわらず、卒業後も気にかけていただけていたことがうれしかったです。また、大学時代に筆者を支えてくれた同じゼミ生の二人には、色々と励ましをいただき、頑張れました。本当に、ありがとうございました。

#### 註

1) 田中美帆『つながる個』広島文教女子大学平成21

- 年度人間科学部初等教育学科卒業論文（未公開）
- 2) 門脇厚司『社会力を育てる』岩波新書、2010、はじめに
  - 3) 武藤博己編『分権社会と協働』ぎょうせい、2001
  - 4) 斎藤隆介作、滝平二郎絵『半日村』岩崎書店、1980。『火の鳥』岩崎書店、1982。『ソメコとオニ』岩崎書店、1987。『三コ』福音館書店、1969。『花さき山』岩崎書店、1969。『八郎』岩崎書店、1967。『ふき』岩崎書店、1998。『猫山』岩崎書店、1983。『ユとムとヒ』岩崎書店、1986。『かみなりむすめ』岩崎書店、1988。『ひばりの矢』岩崎書店、1985。『モチモチの木』岩崎書店、1971。
  - 5) 小平陽一『僕が家庭科教師になったわけ つまるところの生きる力』太郎次郎社エディタス、2016
  - 6) 大河原美以『怒りをコントロールできない子の理解と援助』金子書房、2004

資料1

平成24年11月21日

総合的な学習の時間 実践提案資料

横浜市立F小学校 田中 美帆

- 1 第4学年3組 (計32名 個別感含む)
- 2 単元名 手と心であれあおう
- 3 単元設定について

(1) 題材の成立と子どもの見と

国語科の学習で、「たれもがかわり合えるように」という単元を通して、視覚障害の方が点字を通して、障害をもつコミュニケーションをとり続けることができたことを知った。目が見えない人だけではなく、耳が聞こえない人は手話や指文字を通して、コミュニケーションができたことを知った。子どもたちは2年生のときに、手話で歌を校内のコンサートで発表をしており、手話に関する興味が大きかった。そのことも重なり、手話や指文字、点字などについて、進んで調べ学習を行った。

手話や点字の調べ学習が済み、Fフェスタの場で手話や指文字などを広げたいという声が出た。ゴミの学習でも自分たちに行きたくないという声が出た。ゴミを減らすための工夫話し合いでは、さまざまな意見が出てきた。「みんなに伝えたい」「みんなに分別してもらえようように学習を進めたい」「街のごみ拾いを知って、みんなに伝えたい」「みんなに分別してもらえようように学習を進めたい」「街のごみ拾いをしたい。」など。手話の学習を進めたい児童は、「手話で障害がある人と会話ができるから手話を覚えたい。」「手話や指文字ができると夜に立てることがあるかもしれない。」「お母さんやお父さんがまだよく知らないことだから勉強して伝えたい。」「手話や指文字は動きがあるから楽しいから、知ってほしい。」「障害が増えるかもしれない。」「障害について悪いイメージを持っている人がいるから、知ってほしい。」「障害をもつ人の気持ちを知らりたい。」「障害の人とどのようにかわればよいか考えたい。」など。最終的に、手話を進めたい児童の熱い意見により、ごみの学習を進めたい児童も納得した形で、今回の総合的な学習の時間では、手話の学習を進めることになった。

子どもたちの「人の役に立ちたい」「手助けをしてあげたい」という気持ちがあり、生活の中で生かされるように支援していきたい。また、一番接しているクラスの子の友達一人一人の違いを認め、相手の立場に立って考え、行動することにも、つながってほしい。このような経緯で、サークル団体や障害をもつ方や高齢者の方との交流を進めることになった。

(2) 教師の意図

本校の学区は、3つの区にまたがっている。坂の多い住宅地の中に子どもたちの遊び場となる公園が点字としてある。また、自然豊かな公園もあり、よく本校の総合の教材として使われている。しかし、福祉に関する教材があまりない。坂が多く道が狭く歩道が整理されていない。もちろん歩道の点字ブロックなども見られない。車いすを押して歩くには難しい道ばかりである。視覚障害をもつ方が歩くにも難しい。駅の方まで降りると、視覚障害者のための音声付の信号や手すりのある階段、注意を促す点字の表

示、車いす用のエレベーター、歩道の点字ブロックなどが見られる。このような学区で、障害の方が暮らすには、地域の人のさりげない温かい支援が必要であることに気付いてほしい。そして、どうしたら温かい心でかわることができるのかを、障害にかかわる方々や実際に障害をもつ方、そして、高齢者施設の高齢者との交流によって考えることができたらと思う。

また、様々な人との交流の体験や手話・指文字や点字などの学習したことを発表する体験においても、自分自身と自分以外の人とのかわり方の振り返りをする機会になればと思う。

(3) 育てたい力

- いろいろな人が同じ社会に生きていることに気づき、共に生きていこうとする心や態度を養う。(「生きている喜びの実感」)
- 相手の状況や立場を考えて、思いやりのある行動をとることができるようになる。
- (思いやり 優しさ 寛容 共感)
- 調べたりや体験したことを相手に分かりやすく、話して伝える。(「人とのコミュニケーション 協調 協力」)

(4) 具体的な手立て ～子どもたちをどのように見と、それを生かすのか～

子どもたちの発言や学習カードに書いた内容を細かくとらえていき、話し合い活動やその他の活動で生かす形で返していく。その他、担任と子ども、子ども同士の何げない会話やつぶやきを大切に、子どもたち一人一人がどのようになりたいか今興味・関心を持ち、どのような思いや願いをもっているのかを寄りそう中で感じ取っていききたい。また、困難にぶつかった場合には、みんなで共有し、じっくり話し合い、見つめ直す中で、乗り越えていきたいと思う。

4. 単元について

単元名「手と心であれあおう」

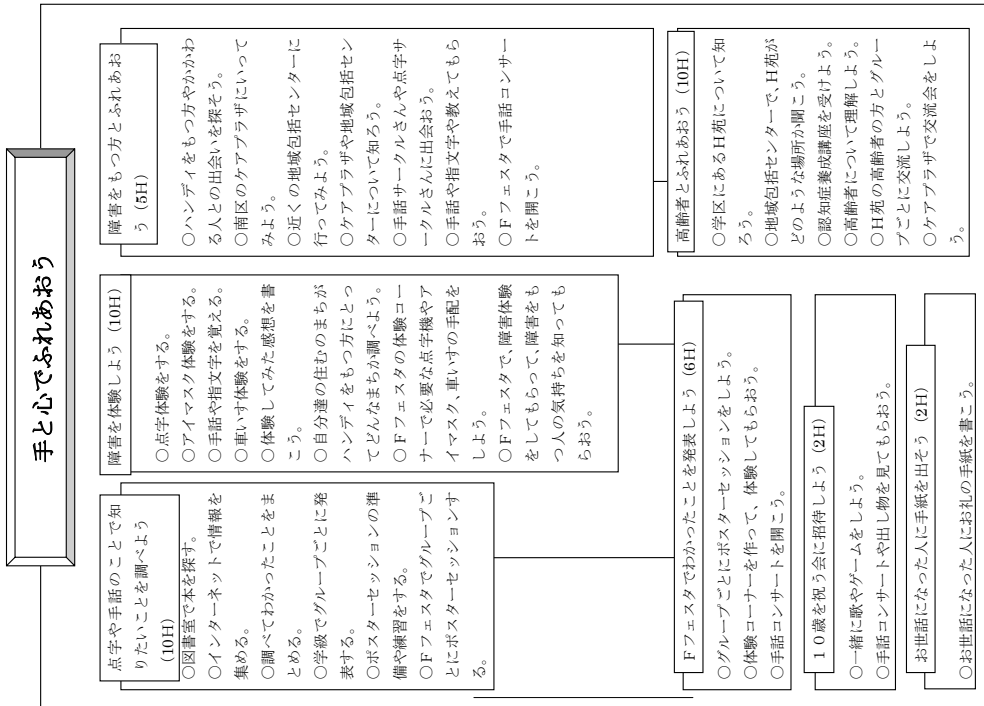
(1) 単元目標

障害をもつ方や高齢者と交流する活動を通して交流の素晴らしさを知るとともに、障害をもつ方々や高齢者の思いや願い、それを支えている人々や施設の利用者を知るとともに、自分たちができるところを表現しようとする。

(2) 身につける資質・能力・態度

課題選択	<ul style="list-style-type: none"> <li>○繰り返しの交流体験から自分たちができるところを考え、計画する。</li> <li>○高齢者の方や働いている人たちとの交流を通して、必要な情報を選択する。</li> <li>○活動を通して自分自身の成長を振り返り、自分の良さを見直す。</li> <li>○教科等で身につけた力を生かし、相手、目的意識をもって表現する。</li> </ul>
問題解決	<ul style="list-style-type: none"> <li>○人のために何かすることは自分のためであることに気づく。</li> <li>○交流を通して課題を発見し、その解決に向けて探求する。</li> <li>○活動を通して自分自身の成長を振り返り、自分の良さを見直す。</li> </ul>
表現	<ul style="list-style-type: none"> <li>○出会った方たちと場や時間、状況に応じた態度で礼儀正しく接する。</li> <li>○交流の中で、多くの人と積極的にかかわろうとする。</li> <li>○活動を通して理解した、自分を取り巻く環境と自分の行動との関わりを考えようとする。</li> </ul>

5、単元構想図 (45 時間)



6、本時の学習

(1) 本時の目標

K先生や手話サークルのみなさんに、豊についての話をしてもらったり、手話を教えてもらったりすることを通して、楽しく交流することができる。

評価規程

**課題達成** 豊の障害をもつ人やその周りにいる人達との交流を通して、豊のことや豊の障害をもつ人のかかわり方について知ることができる。

**問題解決** 交流を通して、相手の良さに気づくことができる。

(3) 本時展開 (21/42H)

時間 配分	学習活動と内容 (☆教師のかかわり) ※教師は手話が少々できる。
1分	1. 交流会を始める。
1分	手話サークルさんと交流会をしよう!!
30分	2. 手話で「こんにちは」のあいさつをする。
5分	3. K先生から「豊」の話を聞く。 ☆手話と口話で話をされるので、様子を見ながら児童に口話の内容を伝える。 4. K先生に知りたいことを質問する。 ・何をしている時が楽しいですか。 ・困ったときは、周りの人にどんな対応をしてほしいですか。等 ☆質問を紙に書き、視覚的に分かるようにする。
12分	5. 自分たちが練習した手話ソングを聞いてもらおう。 ・「世界が一つになるまで」を歌う。 ・「赤鼻のトナカイ」を歌う。 6. 手話を教えてもらおう。 ・音楽会で歌った「MIDORI〜つながる輪〜」歌詞の中で分からない手話を教えてもらおう。 7. お礼のあいさつをする。
1分	☆児童が振り返られるように写真や動画の撮影をする。

資料2

国語科学習指導案

指導者 田中 美帆

- 1 日時 平成25年1月22日(水) 5校時
- 2 学年・組 第3学年1組 30名
- 3 単元名・教材名 読書紹介作品のよきな登場人物を読書ポスターで紹介しよう～モチモチの木～
- 4 補助教材 「半日村」「火の鳥」「ソメコとオオニ」「ミコ」「花さき山」など 計11作品

指導事項と言語活動

- (1) 指導事項
  - 場面の変化や登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて説話を基に想像して読むこと。
  - ◎文章を讀んで考えたことを発表し合い、一人一人の思い方について違いのあることに気づくこと。
  - 文章を讀んで考えたことを発表し合い、一人一人の思い方について違いのあることに気づくこと。
  - ◎表現したり理解したりするために必要な語句を増やし、また、語句には性質や役割の上で類別があることを理解すること。[伝統的な言語文化に関する事項(1) イー(オ)]

(2) 言語活動

- 読書ポスターによる紹介 (言語活動別工)
 

読書ポスターとは、自分が取り上げた本のよさや楽しさを伝えるために効果的に、あらゆる登場人物、出来事などを、作品の感想と紹介文、絵、キャラクターをつけて、自分のお勧め本を紹介するものである。キャラクターとは、あらゆる登場人物の行動・様子・性格・気持ち、大事な言葉や文、感想などから、「これがこの本のおもしろいところだ。」と思うことを一つ選び、短い言葉で表すものである。例示を示しながら3年生の児童でも理解できるようにする。

本単元では、児童同士が登場人物の能力のよさが伝え合えるように、あらずしなとをぬいた「作品名」「主人公をすてきたと思った場面」「そのわけ」「絵」に「キャラクター」をつけたものを読書ポスターとする。

紹介カードよりも読書ポスターの方がみんなに見てもらえるという点で、3年生の児童も意欲をもつて書くことができると考え、本書読活動を設定する。

- 本書読活動「読書ポスターによる紹介スピーチ」の特徴については、次のようにとらえる。
- ① 登場人物に魅力を感じた部分を引用して、紹介したい理由を書く。
- ② 登場人物の能力が伝わるキャラクターを書く。
- ③ 題名・主人公・主人公をすてきたと思った場面とそのわけ・絵を準備ごとにカードに書くこと。
- ④ 読書ポスターを使い、お薦めの本を紹介する。

5 単元目標

- 「モチモチの木」の主人公である豆太に着目して読み、豆太を紹介し合う活動を通して、読書への関心を高めようとする。
- 「モチモチの木」の主人公である豆太の性格や気持ちを叙述に即して想像しながら読みととらえ、豆太の能力について根拠を明らかにして紹介できる。

6 「しっかり教え、しっかり引き出す指導」のために

(1) 単元にかかわる児童の学びの履歴

3年生になり、学級文庫だけでなく、図書室や家からもってきた自分が読みたい本を読みたい本を薦め姿が見られるようになってきた。読み聞かせグループ「ひだまり」のお母さんたちから紹介してもらった本や友達同士で情報交換をしながら、物語に興味をもちはじめていく児童も増えるようになってきた。

そんな本校級の児童にとって、年齢の近い登場人物が出てくる藤澤謙介氏の作品は、子どもたちの心を動かす大きな力があると思う。登場人物に思いをよせ、自分と登場人物とを重ねる経験の一つにできればと考える。また、その読書体験を友達に伝えることを通して、登場人物の魅力を友達に伝え合う楽しさや一人一人感じ方や物語の捉え方に違いがあることが感じとらえたい。そして、読書への興味や関心につながる1冊と書きたい。

また、本校では、場面ごとに登場人物の行動や会話から人物の気持ちや性格を捉えて讀むことを通して、豆太が「おくり」な一面だけでなく、「やさしい」一面があったり「悪気のある」一面があったりすることに気づいて、豆太のすてきたところを本朝のキャラクター作りにつなげていきたい。

しかし、登場人物と自分を重ねて讀むなどの深い読書経験がほとんどなく、主人公の人物を適切に表せるほどの距離感が備わっていない。そのため、読書ポスターを通して、一人だけで楽しむ読書からみんな楽しんで読書ができるようにしていきたい。今回の授業がそのきっかけの一つになればと考えている。

本校級の児童は、金曜日の朝読書や読み聞かせの時間、週1度の図書室の時間を楽しみ、本に楽しんで読書する。休み時間や少しの時間でも本を讀み、読書に興味をもっている子が多い。3年生になって、物語文は、「きつづきの南風」「海をかつとばせ」「ちいちゃんのかげおくり」と学習してきた。「きつづきの南風」では、2つつづきの南風を比べて違いに気づきながら読み、4年生と合同音読発表会を行った。「海をかつとばせ」では、年齢の近い主人公の行動や言葉から気持ちや読み取った、主人公の性格について考えたりしてきた。自分と似ているところや違うところを見つけ、主人公への思いを文章にまとめた。「ちいちゃんのかげおくり」では、時代の違いや、なくしてしまうものがあることに気づきながら読み、読書文を書いて、友達と交流した。また、「かえってきたつりがね」などの本と比べながら、競争でなくしてしまふものについて、グループごとに話し合い、三読書会をした。「モチモチの木」をはじめとすると藤澤謙介作品には、7月に「花さき山」を、「先生おすめ本」に選讀していききたい。

(2) 指導の手立て

- 読書ポスターの例本を提示する。
- 読書ポスターが自分のお薦めの本を紹介するものだとこのことを知らせながら、どのような内容を書けばよいが示す。そのとき、主人公のすてきたところを紹介することを通して、本を紹介することが読書ポスターをかくわけだと伝えておく。

○キャラクター、どのようなものが例示を示す。

読書ポスターでの本の紹介は、4年生での指導内容である。キャラクターがどのようなものであるか、習っていないので、「はまっこ読書ノート」や身近な生活の中にあるキャラクターから例示を示して、キャラクターがどのようなものかをおおえていききたい。キャラクターを取り入れた理由は、読書ポスターでの紹介しやすいように相手に伝わりやすいようにキャラクターを一をつけ加える。

○人物を表す言葉やまをまとめておく。

今まで習ってきた物語文の主人公がどのような性格であったか、子どもたちと確認をする、人物を表す言葉や教科書(上)の付録のところで確認する。

○朗書ポスターで登場人物を紹介し合えるように、話し合い方をおさえる。グループで紹介し合うときに、司会の役割を決めて進める。キャッチコピーを中心に自分が所属する作品の主人公の魅力を声力に感じた場面を紹介しながら発表する。自分の思いに合わせて言葉を選んで話すようにする。

(3) 南区研究主題とのかわり

**身につけるべき言語能力を明確にした国語科学学習の研究**  
～言語活動の充実を図る授業を目指して～

○交流○

朗書ポスターに書いた文章や、場面ごとの読み取りをしなから、豆太の魅力について考えを述べ合う。相手意識や目的意識を打ち出した効果的なキャッチコピーをうまくつかえるように助言する。  
また、自分が魅力だと思った場面やその理由をしっかりと伝え、自分の考えがしっかり活かせるようにしー一人の感じ方や考え方にはさまざまなあるのだなということに気づくようにする。

7 評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	書簡についての知識・理解・技能
①同じ作者の書いた物語を読み、心に残った登場人物の性格を紹介するため、本を繰り返し読んで読み込む。また、本を繰り返し読んで読み込む。また、本を繰り返し読んで読み込む。また、本を繰り返し読んで読み込む。	②自分が選んだ本のおもしろさを紹介するために、性格や気持ちの変化を捉えられている。 ③紹介する理由を説明するために、ふさわしいところを引用したり要約したりしている。 ④一人一人の感じ方や物事の捉え方に違いがあることを感じることができる。	⑤人物を表す言葉をふやすことができる。

8 指導計画 (15時間)

時	学習活動と内容	評価規準と指導の手立て (O)
1	○学習のめあてを立て、計画を立てる。 ・朗書ポスターの例を見て、主人公のすてきなところを紹介する朗書ポスターを書く風通しをもつ。 ・朗書ポスターを書くための学習計画を立てる。 ・斎藤隆介の作品のいくつかを紹介する。	○例にする朗書ポスターを用いる。 ○朗書ポスターを書くためにどのような学習が必要なのか見直しをもつことができる。 ○斎藤隆介の作品を紹介したり、各自で読んでみる。各自で読んでみる。各自で読んでみる。 ⑥同じ作者の書いた物語を読み、心に残った登場人物の性格を紹介するために、本を繰り返し読んで読む。

2	○すてきな登場人物を紹介するために、性格を表す言葉を確認する。 ・性格を表す言葉にはどのようなものがあるのか考える。 ・教科書(上)のふろくにある「人物を表すことば」を参考に語彙を増やす。 ・今まで学習した物語に出てくる主人公がどのような性格であったかを書いた言葉で表す。	○子どもたちから出た性格を表す言葉を短冊にかき、大きな紙にまとめていく。 ○教科書(上)のふろくにある「人物をあらわす言葉」から性格を表す言葉を伝える。 ○今まで学習した物語に出てくる主人公の性格を表す言葉で表現できるように問いかける。 ⑧人物を表す言葉を増やすことができる。
3	○「モチモチの木」の朗読を聞いて、初音の感情を書く。 ・通読して豆太の性格を中心に感情を書くことができる。	○語り手の言葉が地の文になっていることも確かめる。 ○学級でまとめた「人物をあらわすことば」を参考に、どのように教室に掲示しておき、豆太の性格を表す時に活用できるようにする。 ⑨自分が選んだ本のおもしろさを紹介するために、性格や気持ちの変化を捉えられている。
4	○1場面「おくびよう豆太」を読み、豆太の性格を豆太とじさまの二人の関係を訪ね取る。 ・豆太のおくびような性格が読み取れる。書いたりする。 ・豆太の性格について考えたことを話し合う。	○豆太の性格が読み取れる部分に、線を引くことができる。 ○場面ごとに性格をグループで話し合うことができる。 ⑩自分が選んだ本のおもしろさを紹介するために、性格や気持ちの変化を捉えられている。
5	○2場面「やい、木い」を読み、豆太の性格をモチモチの木と豆太、じさまの関係を訪ね取る。 ・モチモチの木がどのような木かおさえる。 ・モチモチの木をみるときの豆太は、黒と夜ではどのように違うかわかる文に線を引く。 ・豆太のおくびような性格などが分かれることを話し合う。	○豆太の性格が読み取れる部分に、線を引くことができる。 ○場面ごとに性格をグループで話し合うことができる。 ⑩自分が選んだ本のおもしろさを紹介するために、性格や気持ちの変化を捉えられている。

	るか考えらる。	
9	○豆太の性格について読書ポスターの「主人公がすてきだなと思った場面」「そのわけ」「作品名」「作者名」「絵」をカードに書く。 ・主人公の能力を伝えるために、自分がすてきだと思った場面とそのわけの書き方を確認する。 ・「主人公の好きな場面」「そのわけ」などの事務カードを書き、台紙に張り、読書ポスターを完成に近づける。	○紹介する理由や根拠として、必要な文や語句を抜き抜いたり、引用したりする文章は「」を付けて記述することを教える。  ⑧紹介する理由を説明するために、ふさわしいところを引用しただり印刷しただりしている。
10 本時	○キヤッチコピーを作って読書ポスターを完成させる。 ・キヤッチコピーがどのようなものか知る。 ・主人公のすてきなところや伝わるようなキヤッチコピーを作る。	○キヤッチコピーがどのようなものか知ることができる。  ⑨読書ポスターを書くことができる。
11	○完成した読書ポスターを使って、豆太のすてきなところを紹介しよう。 ・キヤッチコピーを張り回り、豆太がすてきなところを整理する。 ・グループで読書ポスターを見合い、豆太のすてきなところについて話し合う。 ・全体でグループでの紹介し合った時の感想を発表する。	○グループでの話し合いがうまくいくように、司役を決めて、話し合いの取組みを伝える。  ⑩一人一人の話し方や相手の伝え方に違いがあることを感じるることができる。

6	○3場面「舞月二十のばん」を読み、「山の神様のお祭り」に對するじさまで豆太の気持ちを読み取る。 ・山の神様のお祭りについて、豆太が思っていることが分かるように線を引く。 ・豆太の気持ちが変わるところに線を引く。 ・豆太がどのような性格にあらがれているのか話し合う。	○豆太の性格が読み取れる部分に、線を引くことができる。  ③自分が選んだ本のおもしろさを紹介するために、性格や気持ちの変化を捉え聞いている。
7	○4場面「豆太は動た」を読み、時運を走る豆太の様子と気持ちを読み取る。 ＜前半＞ ・真夜中に目を覚ました豆太は、じさまのどんな様子を見たか線を引く。 ・医者様を呼びに走る豆太の様子や気持ちから分かるように、線を引き、豆太がどんな気持ちであったか考えらる。 ・「豆太はなきなきはしった。」と「なきなきはしった。」の区別は何が考えらる。 ・豆太の様子や気持ちから分かるように線を引き、豆太の気持ちを話し合う。 ＜後半＞ ・豆太の気持ちから分かるように、線を引いたり書きこんだりする。 ・豆太はなぜ、モ子モ子の木に灯がついたのを見ることができたか考えらる。 ・豆太の気持ちを話し合う。	○豆太の性格が読み取れる部分に、線を引くことができる。  ④場面ごとに性格をグループで話し合うことができる。  ③自分が選んだ本のおもしろさを紹介するために、性格や気持ちの変化を捉え聞いている。
8	○5場面「弱虫でもやさしげりゃ」の場面を読み、じさまの言葉の意味について考えらる。 ・語り手は、豆太のことをおくひょうと語うかどうか考えらる。 ・おくひょうな豆太が夜中に一人で医者様を呼びに行くことができたのはなぜか考えらる。 ・「弱虫でも、やさしげりゃ」と「やらなきやならねえことばは、きつとややるもんだ」は、豆太のどんな気持ちを表しているか話し合う。	○豆太の性格が読み取れる部分に、線を引くことができる。  ④場面ごとに性格をグループで話し合うことができる。  ③自分が選んだ本のおもしろさを紹介するために、性格や気持ちの変化を捉え聞いている。



- 9 本時について  
 (1) <本時目標>  
 ○「モチモチの本」の主人公である豆太の性格についてキャッチコピーを作り、組み合わせを通して、一人ひとりの感じ方が違うことを感じることが出来る。

(2) <本時展開> ( 10 / 15 )

学習活動と内容	評価標準と指導の手立て (O)
1 本時の学習課題と学習の進め方を確認する。	○前時までの学習を思い起こさせるようにする。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">キャッチコピーを作って、読書ポスターを完成させよう！</div>
2 キャッチコピーがどのようなものかやキャッチコピーのよさをたしかめる。	○キャッチコピーのよさに気づくようにする。 { ・短い言葉ですてきなどころを表すもの。 ・真い言葉よりも相手の頭にのこるもの。 ○読書ポスターのレイアウトを確かめられるように掲示する。
3 主人公のすてきなどころが見つたわらわたるようなキャッチコピーをつくる。	○豆太のすてきなどころを今まで集めた「人物を教す言葉」から作れるように声をかける。 ○「主人公をすてきだと思う場面」「そのわけ」の裏柄カードを見ながら、自分がすてきだと思ったところが上手くキャッチコピーができるように確かめる。
4 グループでキャッチコピーを見合い、豆太のすてきなどころを組み合わせることができる。	○みんなのキャッチコピーを見て、豆太のすてきなどころをみんなで確認や気付いたことを言い合う。
5 次の内容を知らることができる。	○友達の発表から、自分の考えが深まったことなど、これからの読書に活かしていきたいことを話す。  ② 読書ポスターを書くことができる。

12	○廣瀬隆介の作品の中で、心に染み込んだ作品を選び取り、最も紹介したい主人公を選ぶことができる。 ○「モチモチの本」の読書ポスターの作り方を思い起こして作るように助言する。 ○登場人物の人格や気持ちがかかる筋道を身につけて書き抜いたり、要約したりするように声をかける。 ○どの本を紹介したいかについての人数を確認して、場面の設定をする。	④紹介する理由を説明するために、ふさわしいところを引用したり要約したりしている。
13	○主人公がすてきなど思った場面とそのわけをカードに書く。	④紹介する理由を説明するために、ふさわしいところを引用したり要約したりしている。
14	○キャッチコピーを作って読書ポスターを完成する。	○主人公の性格にあった言葉を思い出せるように「人物を教す言葉」を活用できることを助言する。 ○キャッチコピーがどのようなものであったか確かめる。  ②読書ポスターを書くことができる。
15	○読書ポスターを使って、友達に廣瀬隆介作品の紹介したい本をクラスの友達に紹介する。	・紹介文を簡短のほかに、ポスターの言葉を使ってすてきな登場人物を紹介できるように促す。 ・感想の交流を通して、一人ひとりの感じ方の違いを認め合うよう助言する。  ⑤一人一人の感じ方や物事の捉え方に違いがあることを感じる事が出来る。